

# 青春スクロール

## 母校群像記

saitama@asahi.com

### 師弟の縁が育んだ 歌と旋律が彩る人生

熊谷女子高校（以下、熊女）の校歌は、たおやかで美しい。

ソプラノ歌手の杉下友季子（60、1980年卒）は入学式で先輩たちが歌う校歌を聴き、「ああ、女子校に来たんだ」と感動した。そのまま音楽部へ。武蔵野音大を卒業したばかりの先生のソプラノを聴いてまた感動。職員室についていき、「先生、私も声楽をやりたい」。これで人生が決まった。

放課後は都内で個人レッスンを受ける日々。武蔵野音大卒業後はイタリア、ハンガリー、ルーマニアなど数多くの海外舞台を経験した。地元羽生市で歌の指導に力を注ぐ。

雅楽などで使う管楽器、笙奏者



自宅横にある音楽室でレッスンや動画配信をする杉下。地元羽生市出身の作詞家宮沢章二の名前を冠した記念祭の準備に忙しい。

## 県立熊谷女子高校 5



の増田千斐（38、2002年卒）は曾祖母が熊女出身。「私が生まれたときに『この子が行ける』と宣言したらしいです」。音楽と古典と歴史が好きだったことから笙を習い始めた。

「当時は学の一女（浦和第一女子）、品の川女（川越女子）、美の春女（春日部女子）、ノリの熊女と言われていた」と振り返る。

1年生の時に化学の試験でいい点をとり、先生にほめられた。それがうれしくて1年間まじめに化学に取り組んだ。ノリの熊女の本領発揮である。

声楽家の小川明子（55、1985年卒）は名指導者として知られた小林利道に習いたい一心で熊女



笙を手にしながら「熊女は生徒一人ひとりの個性を伸ばしてくる。それが私に合っていた」と語る増田

に。東京芸大受験直前にドアには生まれ、指を切る大けがをした。先生たちが芸大側に「けがに関係なく、彼女の音楽性を正當に評価してほしい」という趣旨の文書を添えてくれた。事故を知った同級生が泣いてくれた。このとき、こ

う誓った。「この人たちを裏切ることは絶対できない」

きつぶがよく、面倒見もいい性格は先輩や後輩から信頼された。熊谷高校との合同演奏会50周年記念式典のときには指揮を任せられた。「がくちゃんくらぶ」というファンクラブもあり、熊女同窓会の中核的存在だ。

小川の恩師、小林の姉の斎藤百合子（87、53年卒）。12歳から三



写真立てにおさまった恩師小林とのツーショットに思わず笑顔の小川。新譜「海ゆかば 信時 深歌曲集」の評判もいい

味線をはじめ、長唄の3代目杵屋五三郎に師事。熊谷の銘菓、五家宝にちなんで杵屋五寶の名前を持つ。

師弟のつながりが連続と続くのは伝統校ならではの。小川を先生と慕う岡崎麻奈未（37、2003年卒）は小学生のころから「音楽家になる」と決めていた。音楽関係の高校進学を両親に伝えると、「勉強して熊女に入ったら音楽の勉強をしていい」。そこで音楽と人生の師、小川と出会った。「熊女なくして私の人生はない」。国立音大を卒業してオーストリアのウィーンに渡り、伝統的な歌曲「ウィーンリート」のコンクールで1位に。2019年にできたアルヒエ劇場の運営、プロデュースも任せられ、いまやウィーンの音楽シーンには欠かせない存在になった。



ウィーンの音楽仲間との1枚。「今でも大切な仲間は熊女の友たち。夏は絶対に帰ります」と話す岡崎（手前右）